

ネパールの異なるふたつのダカ織

高道 由子 たかみち ゆうこ
 京都大学大学院博士課程

色彩豊かな幾何学模様が織り込まれるネパールのダカ織は、同じ織物ではあっても開発援助やフェアトレードなどの影響を受け、東西でその発展に違いが見られる。新しい技術を誰がどのように選択するのか。人びとの織りに対する姿勢が、手芸のあり方を変えていく。

ネパールを代表する布

ネパールを訪れたことのある人ならば、必ず一度はダカ織とよばれる布を目にしたことがあるに違いない。ダカ織とは、平織地に多色の糸を織り込んだ織物で、ネパールの男性が日常的にかぶる「トピー」という帽子に使われていることでよく知られている。手織りのダカ織は一日に数十センチしか織り進めることができないため、以前は国王などの限られた人のみが着用できる高価な布であったが、現在はネパール中で親しまれ、トピーの他にも、サリーやクルタスルワールといった民族衣装、シヨールやポーチ、シャツ、ネクタイなどに日常的に用いられ、婚礼衣装に使う布としても人気がある。

代表的なふたつの生産地

ダカ織の産地はネパール全域に点在している



ネパールの男性が日常にかぶるダカトピー (2015年8月)

るが、西ネパールのバルパと、テラトゥムを中心とした東ネパールの各地が有名である。これらの二地域に、同じ「ダカ」とよばれる織物が広まった背景は異なる。バルパでは、一九五八年に当時の政治的有力者がインドで学んだ技術を基に織物工房を創設したのがきっかけとされる。彼は産業振興のために次々と他の工房創設にも尽力し、王室の注文を受けるようになり、バルパのダカは歌謡曲の歌詞にも登場するなどネパール国内での人気を獲得していった。

一方、東ネパールでは、一九八〇年代からい



ジャガード織り機を用いるバルパの村の工房 (2015年9月)

ギリス政府の開発援助プログラムが実施され、当時から既に農閑期の補完的な収入手段となっていたダカ織の製作が、支援者の目に留まった。支援者は「同じダカは存在しない」と言わしめるほど豊かな織り手の創造性をなるべく活かしながら、新しい色糸を導入するなど積極的にもの作りに介入し、東ネパールのダカ織を海外や首都カトマンズに広めていった。

織りにかける時間

現在、バルパではほとんどの工房で飛び杼やパンチカードを使用して複雑な模様を簡単に織ることのできるジャカード織り機が導入され、インドから出稼ぎに来た男性が働いている工房も半数近くあり、物凄く速さで布が織られている。こうした国外の労働者を受け入れる理由には、二〇〇〇年代以降、ネパールから海外への出稼ぎが急増し、仕送りを手にしたバルパの多くの女性が骨の折れるわりには低賃金である織りの仕事を辞めてしまったという背景がある。

一方、テラトゥムでも開発援助プログラムの際に、飛び杼を備えた織り機などが工房に導入されたものの、これまでと異なる織り方への抵抗が強く、織り手たちは使いたがらなかったため広まっておらず、生産性はバルパに比べて随分低い。商品価格はほとんどの場合、テラトゥムの方が格段に高く、模様が細かいほ

ど価格は上がる。テラトゥムの店舗で調査しているときに、「もっと安いのはないの?」と客が訊ねると、工房主は決まって「テラトゥムのダカは、バルパの機械で織ったものとは違って、手で織っているから高い。時間がかかっているんだよ」と説明していた。

テラトゥムでは、一九八〇年代の開発援助プログラムとその後の流れのなかで、織り手が自然物や身の周りの道具から着想した模様の獨創性や唯一性が失われ、工房ごとの簡易なパターンと化していった。しかし、当時の支援者が主導したフェアトレードが二〇〇〇年以降に中断してからは、工房での生産は存続しつつも、家庭内での生産が再び増加し始めている。家庭で機織りする織り手は、工房が店舗で販売する糸から好きな色を購入する。模様は、店舗に置かれている商品を見本にしつつ、ほとんど織り手自身が決める。そしてできあがった布を再び店舗にもち込み、査定の上で買ってもらう。このようなしくみによって、現在空いた時間に家で機織りする人びとが近郊の村々にまで広がっている。

同じ名前の、しかし起源の異なるふたつのダカ織。産業として大きく発展したバルパのダカに対して、テラトゥムのダカ織には、合間の時間に織り手が工夫をしながらゆったりと織り進めるといった製作のあり方が再び息づいているのではないだろうか。